



小金井と貫井 地名の由来と湧水

小金井と名付る事は、当処はるか南の方に人見山といふあり、此山より清潔の水湧出して、一村の人三拾戸余を養ふ、元来此辺凡三四里余の間、むかし更に清水なく、或は土中に鉄気あり、又は塩気あり、或は赤く、或は白く、扱は渋味ありて濁水飲がたく、人住居なりがたかりしに、天の扶助によりて自然と清水を得たるは、黄金を拾ひ得しに似たり、故に居村と成て小金井とは名付ぬ。

十方庵敬順『遊歴雑記』朝倉治彦 編訂

『遊歴雑記』の著者十方庵敬順(1762～1832)は現在の文京区小日向1丁目にあった本法寺の子院廓然寺の住職です。隠居後、江戸近郊の散策を趣味としていましたが、『遊歴雑記』はその集大成となった紀行文です。上掲の箇所は文化10年(1813)に小金井観桜に訪れ、「小金井」の地名の由来を土地の古老から聞き取りをした際の記録です。黄金のように貴重な湧水から「小金井」の名がついたとするのは、現在でもよく知られている通りですが、その湧水を人見山、つまり現在の府中市浅間山の湧水としています。

浅間山の湧水は「おみたらし」と呼ばれ、浅間山3つの頂のうち最も低い中山の小金井側(北面)にあり、現在も見ることができます。今では水量は微々たるものですが、昭和初期、梶野町長昌寺の住職高橋素仙は雨乞いのため、この「おみたらし」の湧水のそばで山籠もりをした逸話が残っています(芳須緑『小金井風土記』)。『遊歴雑記』とはほぼ同時代の地誌『新編武蔵風土記稿』や『武蔵名勝図会』にも「おみたらし」の湧水の記録はありますが、「小金井」の地名の由来になったとは書いていません。いずれにせよ『遊歴雑記』の文章を素直に読めば、当否はともかく「おみたらし」の湧水を「小金井」の地名の由来と考える地元民がいたことには間違いありません。現代では「おみたらし」の湧水はすっかり忘れ去られ、聞こえの良い黄金に値する貴重な湧水の話だけが独り歩きしています。

最近ではこの「小金井」の地名の由来となった湧水を、貫井神社の湧水とする説も流布しています。例えば東京都環境局はそのホームページで、貫井神社の湧水を「小金井」の由来と紹介しています。

国分寺崖線(はげ)の下の大きな岩の間から湧出。湧水量が比較的多く、枯渇せず、「小金井」の由来。周辺自然環境良好。

東京都環境局 東京の名湧水 57 選
No.29 貫井神社(小金井市)

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/water/conservation/spring_water/tokyo/place_29.html

風光明媚な貫井神社は現在も豊富に清水が湧き出ているので、ここを「小金井」の由来とすれば、話の通りがよく一般受けもしやすいのですが、事実とは異なります。明治政府は明治21年に市制・町村制を公布、翌22年に施行して明治の大合併と呼ばれる全国の自治体の大規模な編成取りまとめを行っています。この時はじめて貫井は小金井の一部となったのであって、それ以前には小金井村と貫井村はそれぞれ別個に成立していました。貫井村総鎮守貫井神社の湧水を「貫井」の地名の由来とするならまだしも、「小金井」の地名の由来とするのは無理があります。



府中市浅間山「おみたらし」の湧水

「貫井」の地名の由来については、湧水が夏は冷たく冬は「^{ぬく}温い」からであるとする説が知られています。この説は大正時代に^{さんらくそう}三楽荘を造成した^{まえだ たけしろう}前田武四郎(1867～1931)が、武蔵野会の会報『武蔵野』に大正11年12月に寄稿した一文「貫井は昔し温井と書いた理由」が情報源のようです。

この貫井＝温井説の発端は、大正10年11月28日、前田武四郎がとあるイギリス人を後述する自分の所有地の杉林にあった「おおせど」の湧水に案内したときに始まります。イギリス人は湧水に手を浸して普通の湧水とは違い温かいと言い出し、温度計で水温を計ることを熱心に主張します。12月4日には、今度はイギリス人の方から前田武四郎を誘って、おおせど・貫井神社・新次郎池を回って水温を計り、いずれも摂氏15～16度との結果を得ています。これら湧水の水温の比較対象として、付近の玉川上水の分水2箇所の水温も測ったところ摂氏9度と9.5度でした。開渠で常に日光に晒されている分水に比べて、湧水は「温い」と二人は結論付けたわけでは

ず。さらに後日、^{たけこし よさぶろう}竹越与三郎(1865～1950)の訪問によって、前田武四郎は貫井＝温井説を確信するに至ります。竹越与三郎は民友社出身の歴史学者・著述家で、国木田独歩の先輩に当たる人物ですが、貫井についてある書物を読んだところ、「温井」と書かれていたと前田武四郎に教えています。書物のタイトルは書かれていませんが、この一言が前田武四郎にとっては決定打になったようです。

地名の表記について付け加えておくと、一般的に地名は話し言葉として広く通用したのち、初めて紙の上に文字として書かれるものです。しかも地名や人名は音訓が同じならば、どんな漢字を当てても構わなかったので、小金井と貫井にも異なる書き表し方が

あります。
小金井…黄金井・^{こがね}金井

貫井…温井・抜井

表記法が様々あるのはむしろ当然で、漢字の字面だけで地名の起源を類推するのは、本末転倒に陥る危険性を免れ得ないでしょう。その点、前田武四郎は水温の実地調査を経て、漢字表記の意味を推測しています。実証史学が顧みない地名由来説はまだ他にもありますが、際限がないのでこれ位で止めておきます。ただひとつ言える確かなことは、小金井と貫井は共に水、特に湧水と関連付けてその地名の由来が語られてきたことです。

この小論は現在も水が湧いている場所(★)に限らず、水が枯れてはしまったが過去には湧いていた場所(☆)をも含めて、小金井市域の湧水点を西から東へリストアップしたものです。あくまで自然に地表に湧き出た水だけを採りあげていますので、井戸から汲み上げた水は含まれません。「井」は井戸ではなく、ここでは湧水を意味します。また常時水が湧いておらず、雨期に間欠的に水が湧く^{でみず}出水もありましたが、本稿では含めていません。※ 当館の性質上、自然史的記述ではなく歴史的あるいは民俗的な記述にとどまり、基礎史料は郷土史の漠然とした記述に頼らざるを得ないことをご了承ください。

※ 間欠的な出水については、^{とみなが じろう}富永次郎(1909～1969)が昭和31年に角川新書から刊行した『失われた季節—日本人の記録』で、国分寺崖線にあるムジナ坂西横の自宅(中町1-13-1)の出水について記録しています。

出水というのは、私の住む家の裏側に崖があり、そこからの出水のことである。この敷地は斜面なので、そこを一部削って平地にし、家を建てたのである。水道に当たっているせいか、五、六年に一度の割で、なが雨のあと水が出る。出はじめると、ながい時は四十日ぐらい、数カ所から、きれいな清水がコンコンと湧き出す。

富永次郎『失われた季節—日本人の記録』

昭和23年、富永次郎はこの自宅に親友の^{おおおか しょうへい}大岡昇平(1909～1988)を呼び寄せ、大岡はこの富永邸で『武蔵野夫人』の構想を練ったことは有名です。大岡は出水のことも富永から聞き及んでいたことでしょう。



竹越与三郎(1865～1950)
『三叉文存』大正3年より

★① 新次郎池 国分寺市南町1-7

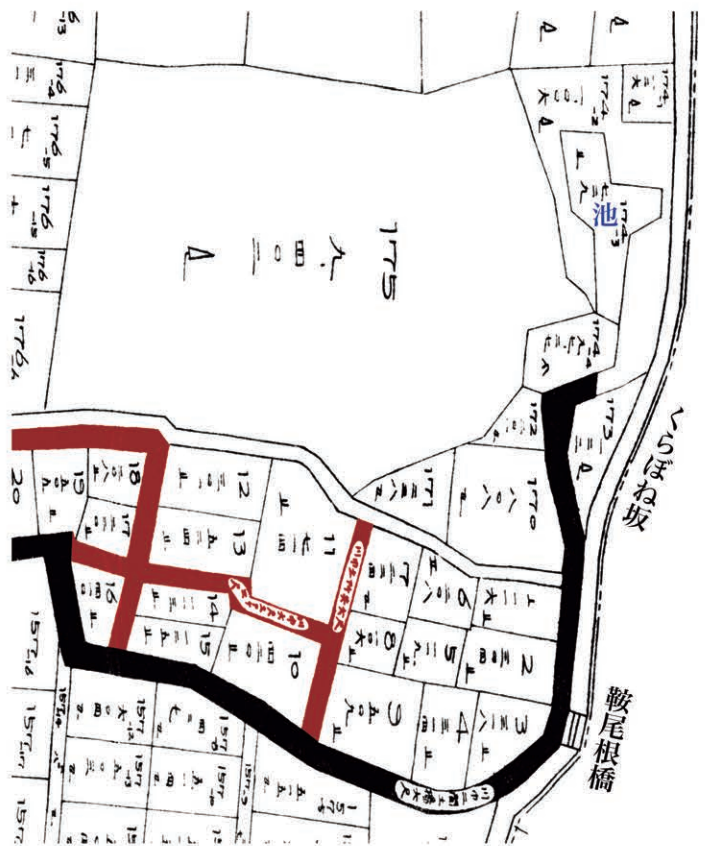
東京経済大学構内遺跡水源地
東京の名湧水 57 選 No.36

東京経済大学国分寺キャンパス敷地内の湧水で野川に流れ込んでいます。くらぼね坂西側の湧水点なので国分寺市域に属しますが、隣接する貫井との関わりが深いので、このリストに採りあげました。この湧水は「諏訪の出」と呼ばれ、小さな沢蟹が沢山いて子どもたちの遊び場でした。池のほりにあった通称「お諏訪さま」こと諏訪神社の小祠がその名の由来ですが、戦後に廃祠されています。この諏訪神社に貫井の地域住民が野菜などのお供えをすると、前に誰かがお供えした物のお下がりや、自宅に持ち帰り食べる慣習があったそうです（鈴木安彦談）。

「新次郎池」は戦後に命名されたもので、東京経済大学学長北沢進次郎（1887～1980）に由来し、東京経済大学の前身は大倉財閥によって設立された大倉高等商業学校です。敗戦直後の昭和21年に国分寺に移転してきましたが、戦中は同じ大倉財閥系列の銃器工場である中央工業（株）南部工場の所有地で、貫井の住民も工員として勤めていました。この湧水の西側には寄宿舎がありましたが、これは住み込みで働く工場付属の青年学校生徒たちのためのものです。

この新次郎池から300mほど東に位置する三楽の森公共緑地や三楽公園は三楽荘の跡地で、三楽荘は大正時代に日本電気（NEC）の設立発起人であった前田武四郎（1867～1931）が造成した豪邸です。前田武四郎は武蔵野文化協会の前身である武蔵野会の会員でしたが、同会の会報『武蔵野』に大正11年12月に寄稿した「貫井は昔し温井と書いた理由」には、三楽荘付近の湧水のひとつとして「日向氏地内」の湧水を挙げ、「日向氏は其水で山葵を作って居る」と記しています。今日でも新次郎池にワサビ田があったとする情報が出回っていますが、それは日向氏が新次郎池一帯の持ち主であった時代のことでしょう。この日向氏が一体誰なのか、その名を未だに記憶する地元民の証言に基づいて、筆者は実業家日向利兵衛（1874～1939）であると推理しています。日向利兵衛は前田武四郎と同じく武蔵野会の会員で、この国分寺村の外れだけではなく小金井の貫井神社西側にも土地を所有していました。

ところで前田武四郎の子孫である前田家では、三楽荘の庭園の設計は日比谷公園の設計者によるものと伝えています。日比谷公園の設計者といえば本多静六（1866～1952）です。「日本の公園の父」と呼ばれる本多静六は、日比谷公園を手始めとして全国の公園の設計や森林保全に携わっています。本多静六の弟子には「国立公園の父」と呼ばれる田村剛（1890～1979）がおり、本多に同行して全国の大規模公園の設計に当たっています。この田村剛は実は日向利兵衛の長女の婿です。日向利兵衛もまた建築や造園技術に造詣が深く、熱海市にある旧日向家熱海別邸は、母屋は銀座和光などの設計で著名な渡辺仁（1887～1973）、その地下室はドイツ人建築家ブルーノ・タウト（1880～1938）が日本に唯一残した建築で、国の重要文化財に指定されています。日向利兵衛と前田武四郎の間には単なる近所付き合いを越えた人脈があるようですが、詳細は今のところ不明です。



『東京府北多摩郡国分寺町土地宝典』昭和15年（1940）より
黒線は野川。赤く塗った部分は改修工事で埋め立てられた流路。
新次郎池は記入されていません。

★② 貫井神社 貫井南町 3-8

貫井遺跡水源地
東京の名湧水 57 選 No.29

本殿の西横から水が湧き、社務所手前には小規模な滝があります。ここは改修工事前の野川が、野川全流域のなかで最も国分寺崖線と接近していた場所。現在「湧水の道」と名付けられている遊歩道は、実際は旧野川の流路です。野川と湧水、さらには社務所横の階段を上れば富士山を遠望する景勝地で、ここを神聖な土地として弁財天を祀ったのは現代人にも大いに頷けることです。

明治 22 年、JR 中央線の前身である甲武鉄道が開通したとき、境停車場（武蔵境駅）の次は国分寺停車場（国分寺駅）で、武蔵小金井駅が正式開業するのは大正 15 年のことです。甲武鉄道開通後、数多くの沿線名所案内が発行されますが、貫井神社の最寄り駅は国分寺駅としています。それらのひとつ『甲武鉄道もより名所案内』にある貫井神社の案内は次の通りです。

貫井の弁天

国分寺停車場より東十丁貫井村にあり、境内樹木繁茂り至て閑静なる地なり。その祠は丘の半腹にありて、此処より遠く富士、箱根等の山々を見はらし、景色甚だよし。又池あり常に清水湧き出で、流れて瀑布となる。此地四時ともに遊ぶによけれども、就中春は小金井観花の序に來りて桜を賞し、夏は瀑布を浴びて暑を避くるに妙なり。

『甲武鉄道もより名所案内』明治 23 年（1890）



昭和 5 年春に撮影された国分寺駅ホーム

名所案内の掲示板（右）には、貫井弁財天・国分寺旧址・大國魂神社・小金井の桜の 4 つの名所が挙がっています。このうち、最も近いのは貫井弁財天（貫井神社）八丁。

映画『日本百年』昭和 49 年より



貫井プールを工事する青年会 大正 12 年（1923）4 月 15 日

現在、駐車場になっている場所を南に向けて撮影。背景にプール南横の田圃が写っています。水色で記入した線は、改修工事前の野川の流路（現 湧水の道）。旧野川は離れた場所からは写りにくいです。左端は弁天橋。

文末に「就中春はとりわけ小金井観花の序ついでに來りて桜を賞し、夏は瀑布たぎを浴びて暑あつさを避くるに妙なり。」とあり、春は小金井桜のついでに貫井神社の桜を見に訪れ、暑い夏には社務所手前の滝で水を浴びることを勧めています。貫井神社と玉川上水堤の小金井桜は、小金井村観光振興の二大拠点であったので、沿線名所案内にはよくセットで載っています。しかも小金井桜の中心地であった小金井橋の南岸には「貫井遊園地」と書かれた看板が立っており、貫井神社一帯を「貫井遊園地」と名付け、小金井桜と共に観光誘致を図っていたことがうかがわれます。

大正デモクラシーたけなわであった大正12年には、貫井の青年会が小金井最初のプール「貫井プール」を自力で建造しています。現在、駐車場になっている場所にありましたが、昭和48年6月に閉鎖されています。湧水を引き込んだプールで、実際に泳いだ方は、口々に夏でも冷たかったと証言しています。その排水路はプール建造以前からあった田圃の用水路を流用したもので、この用水路には「おおせど」の湧水も流れ込んでいました。



小金井橋南岸の「貫井遊園地」と書かれた看板
大正～昭和戦前



Nukui Benten Park 瀧の水清地園遊井貫

絵はがき「貫井遊園地清水の瀧」
大正～昭和戦前



本殿西横の湧水
昭和63年（1988）10月



社務所手前の滝 現在



『貫井村全図 坂下』明治8年（1875）

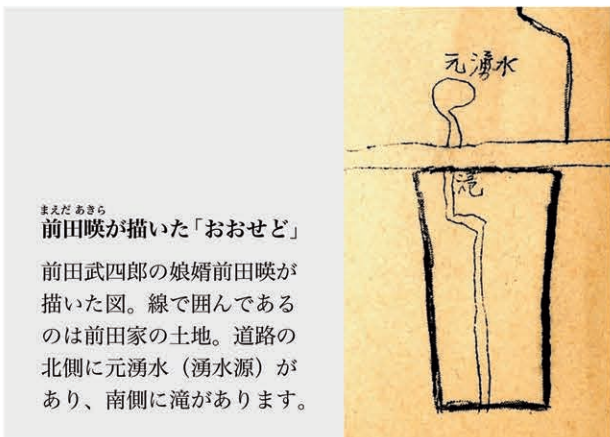
小字「荒牧」から南側の貫井村の地図。野川と用水路は青、田圃は黄色、畑は肌色、林は緑、宅地は白、道は赤に塗られています。このあたりでは、田圃は旧野川の北側にありました。

☆③ おおせど 貫井南町3-7

貫井遺跡水源池

貫井神社の鳥居前から東へ240mほど行った地点にあった湧水。道路の中央に奇妙なガードレールがあるので目印になります。昭和53年に刊行された『小金井市誌V 地名編』では「前田邸下」の泉と表現していますが、地元貫井では「おおせど」と呼ばれ、あえて漢字で書けば「大瀬戸」でしょう。地図上では道の南側(500番)が水源池のように見えますが、実際には道の北側(501番)が水源池で道路を横断していました。小さな滝を成して用水路に流れ込み、用水路は大正12年の貫井プール建造後、その排水路として使用されました。

大正時代、この一帯は前田武四郎が三楽荘を造成して前田家の所有地になりました。前田武四郎が著した「貫井は昔し温井と書いた理由」には、おおせどの湧水を「小生地内湧水」と記し、「余の地内にも可なりの湧水が杉林の中にある。」と述べています。三楽荘造成に伴う出土物は貫井遺跡の発掘調査の嚆矢といえますが、その水源池は目前にあったということになります。この湧水について郷土史家星野進一は次のように書き残しています。



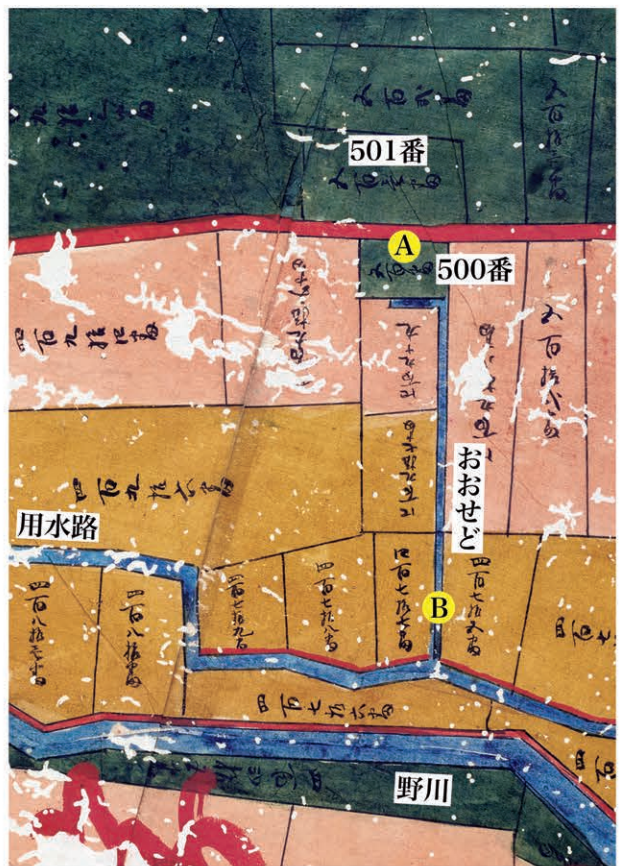
まえだあきら
前田暎が描いた「おおせど」
前田武四郎の娘婿前田暎が描いた図。線で囲んでるのは前田家の土地。道路の北側に元湧水(湧水源)があり、南側に滝があります。

前田別荘の南側、低いガケ下を東西に通じる道があり、雑木に囲まれた道の南側には音を立てて落ちるおよそ十尺(三祀)の滝があった。

星野進一「大正時代の貫井風景」

昭和57年7月11日 小金井新聞

「低いガケ下を東西に通じる道」とは、貫井神社前の道のことです。湧水が消滅した時期は明らかではありませんが、戦後に前田家が土地を売却した以降のことと思われます。



『貫井村全図 坂下』明治8年(1875)

緑色で塗られた区画は林を示し、501番を含む道の北側は杉林でした。道の南側では、林は滝があった500番のみ。

★④ 滄浪泉園 貫井南町 3-2-28

はけうえ遺跡水源地

東京の名湧水 57 選 No.30

言うまでもなく滄浪泉園の池の湧水のこと。この滄浪泉園の池はなぜか地図上の記載が少なく、その多くが池の南から流れ出る湧水路から描き込まれています。当館所蔵の明治8年の地図『貫井村全図 坂下』は、福沢諭吉の弟子で実業家の波多野承五郎(1858～1929)が、大正期になって滄浪泉園を造成する以前から池があったことを証明する数少ない地図です。

池から流れ出た湧水は南へ下って野川に落ちていましたが、薬師通りを横断する手前で嘉永4年(1851)に鈴木家が設置した水車を回していました。この水車は鈴木家の当主弁次郎の名をとって弁車べんぐるまと呼ばれたと、郷土史家芳須緑は書き残しています。鈴木家が水車で賃搗きをしていた地所(527番)は、大正元年に波多野承五郎が買い取っていますが、大正11年12月に前田武四郎が著した「貫井は昔

し温井と書いた理由」には、「波多野氏は之(湧水)で水車を廻はし米を搗かして居る。」とあります。ということは波多野承五郎が鈴木家から取得したのちも水車は残っていて、波多野家がそのまま使用していたのでしょう。水車があった場所は滄浪泉園の入り口から薬師通りに下る弁車の坂の西側で、現在は住宅地になっています。

この弁車の坂は滄浪泉園の造成に伴い、貫井村と小金井村の境界に合わせて新たに敷設した道です。それ以前は滄浪泉園入り口あたりから湧水路を渡って、現在の貫井トンネル東側に曲がる旧道がありました。この旧道は曲がっているうえに、国分寺崖線上の傾斜地の不便な坂道でした。滄浪泉園は当初、北は連雀通りから南は薬師通りまで、はけの斜面一帯を占める広大な敷地でした。この一帯を一括して取得した波多野承五郎からすれば、敷地内の通行不便な旧道は当然邪魔になったので、滄浪泉園造成後、廃道になりました。この旧道は貫井トンネル付近にあった六又路「貫井六道の辻」の六道のうち、最初に無くなった道です。



『貫井村全図 坂下』明治8年(1875)

池は539番、水車があった鈴木家は527番。貫井六道の辻付近は虫食いのため破損しています。現在の貫井トンネル東側の国分寺崖線上にまで田圃(黄色)があったことが分かります。

滄浪泉園は波多野承五郎が昭和4年に亡くなったのち、昭和12年に波多野家から大久保利通の甥で旭硝子の会長を務めた山田三次郎（1870～1939）の手に渡っています。さらに昭和14年、山田家から三井鉱山の会長を務めた川島三郎（1883～1959）が取得し、川島別荘とも呼ばれました。つまり波多野別荘から川島別荘に主が交代したのではなく、その間に山田別荘であった時代が介在しています。

【以下、次号に続く】



◎波多野承五郎一家

左上から娘婿の松井春生（1891～1966）、波多野承五郎、次女の松井花、夫人の波多野すが、孫の松井圭一、孫の松井久子。
波多野承五郎は日向利兵衛や前田武四郎と同じく、武蔵野文化協会の前身である武蔵野会の会員でした。

『アサヒグラフ』
昭和2年9月28日号より



◎昭和47年の住宅地図

小金井市 [1972] 住宅地図出版社より
滄浪泉園の保全運動が起きる直前の住宅地図。「滄浪家園」は誤記。川島三郎はすでに逝去しているにもかかわらず名前が記入されています。滄浪泉園南側（薬師通り側）の土地はすでに分譲済み。昭和56年には連雀通りから南の貫井トンネルや新小金井街道が開通し、立ち退きを余儀なくされた住宅も記載されています。

小金井市文化財センター通信 No.1

小金井の湧水点 part 1
文/構成 多田 哲 (学芸員)

令和2年11月30日 発行

小金井市文化財センター

(旧 浴恩館)
小金井市緑町3-2-37
(浴恩館公園内)

☎ 042-383-1198